



佐渡を世界遺産に

目指せ！世界遺産登録！！「佐渡島の金山」

能 卷 絹

五段神楽

天領佐渡両津薪能 特別公演

令和四年十月一日（土） 開演 十九時三十分

佐渡市原黒・椎崎諏訪神社能舞台

※ 雨天の場合は、会場を金井能楽堂に変更することがあります

主催 天領佐渡両津薪能実行委員会

アースセレブレーション実行委員会

佐渡市

「佐渡宝生」

能楽五流のひとつ、宝生流は、加賀宝生をはじめ、南部宝生、会津宝生、佐渡宝生など江戸時代からの流れが根強く今日に受け継がれています。

慶長九年(1604)、佐渡奉行となった大久保長安が佐渡に猿楽師を同行したことから佐渡における能楽が始まりました。常太夫、杵太夫を中心に、おそらく観世座が生まれ、相川の春日社で神事能が催され、その後次第に国中から島内各地に広まっていきました。両太夫の絶家後は潟上の本間太夫がこれに代わって佐渡能楽の中心になっていきます。

本間家初代となる本間秀信は、江戸の宝生太夫の門を叩き、その教えを受けて寛永十八年(1642)に佐渡に帰ります。慶安四年(1651)、佐渡奉行から正式に宝生の能太夫を拝命し、さらに翌年には宝生宗家より能太夫の世襲を認められます。ここに「佐渡宝生」の礎が築かれることとなりました。本間太夫は代々宝生宗家の教えを受け、佐渡に正統の宝生流を伝えてきました。

加賀には「謡が二階から降ってくる」という言葉がありその盛んな様を伝えています。一方佐渡にはこんな言葉もあります。「舞い倒す」。能舞が高じて身上を潰すというものですが、それは修行を積んで正統な宝生の能を舞おうとする「佐渡宝生」の本質を内包する言葉であると言えます。

能解説

天領両津薪能実行委員会 神主式二

火入れ式

ツレ(男) 齋藤 達也

シテ(巫女) 金井 雄資

卷

絹

ワキ(勅使) 田辺 進二

大鼓 石川久仁於 太鼓 葛西 直樹

小鼓 幸 信吾 笛 本間佐登瑠

五段神楽 間(従者)湯田 拓也

齋藤 貴史 石平 伸一

笹川 通博 石山 勝秋

地謡 齋藤 隆 神主 式二

佐々木雅文 土屋 晴夫

神主 和人 石田 信康

後見 金井 賢郎

齋藤美千枝

永田 治人

附祝言

終演予定 二十時五十分頃

卷絹(まきぎぬ)解説

時の帝は霊夢のお告げにより、千疋(せんびき)すなわち二千反の巻絹を熊野権現(和歌山県田辺市)に納めよとの勅使を立たせられた。都からも巻絹を運ぶ使者が熊野に向かう。途中、音無天神に参詣し、咲き匂う冬梅に心動かされた使者は、心中に一首の和歌を詠じて天神に献じるが、そのために遅参してしまい、厳しく咎(とが)められ縛りあげられてしまふ。

そこへ音無天神の乗り移った巫女(シテ)が現れ、使者が手向けた詠歌を称え、すぐに縛を解くよう命じる。神慮を疑う勅使に、巫女は、歌の上の句を使者に問え、われは下の句を詠み継(ついで)ぎうと言ひ、「音無にかつ咲き初むる梅の花」(使者)、「匂はざりせば誰か知るべき」(巫女)と続けて、今は神慮に偽りないことが解り、縛を解かれる。

巫女は、まごころのこもった和歌は神慮に叶い、あらゆる悪念を去って天地と心の平安を得るのだと説き、その昔、婆羅門僧正と行基菩薩の交わし合った和歌の徳を称え、祝詞を上げ、熊野権現は荘厳な霊地なりと語り舞う。「五段神楽」

熊野権現の本殿が、阿弥陀如来と一体の神を祀るのをはじめ、全山が仏法守護の霊地と狂い舞う内に、憑依していた神は去り、巫女は本性に戻るのであった。

曲の中に語られる婆羅門僧正すなわち菩提僊那(ぼだいせんな)は、東大寺大仏開眼供養の導師を勤めた天竺(てんじく)生まれの高僧。日本初の大僧正となる行基に迎えられ平城京に入ったとき、菩提僊那は数え三十三歳、行基は七十歳であった。